武蔵野

埼玉大学図書館

2011年11月11日　10号

「グローバル化」の中の社会と文化

はじめに　むつめ祭の季節がやってきました。埼玉大学の文化の祭典であり、学内交流・多文化交流・近隣地域との交流の場です。むつめ祭実行委員会を中心に準備が進められ、多彩な企画が自主的に実施されることはとてもすばらしいことだと思います。紅葉がすすみ秋が深まる頃、各地で収穫を祝う祭りが催されてきたものです。学園祭も祭りの一つです。サークル・同好会・団体・グループなどの活動の成果（「収穫」ともいえましょう）を披露する場であり、その喜びを分かち合う機会でもあります。昨年は、残念なことに天気の悪化で中断を余儀なくされてしまいました。今年は、すがすがしい青空の下で賑やかな祭りになりました。むつめ祭が、大学と地域の交流を深め、活気づかせることを期待しています。

異常に暑い夏が過ぎ、構内にも落ち葉が舞い、道ばたに木の実が転がります。図書館前庭の柿の枝もたわわに実をつけ、風情を醸し出しています。今年は、3月の大震災・福島原子力発電所（以下原発）爆発事故にはじまり、歴史的な災害・惨禍に見舞われ、その重く深刻な苦しみは今なお続いています。収穫の秋とはいえ、被災地では祭りを楽しむ余裕などないのが現実です。朝のニュースでは、福島第２原発の原子炉から放射性物質（キセノン 133,　同 137）が検出され、核分裂が起こっている危険性が報じられていました。核分裂が進み再爆発が連鎖的に起これば、放射性物質が既に汚染されている日本全土にまたしても大量に飛散・降下し、私たちが住める土地は確実になくなってしまいます。黄金の稲穂が波打つ景色があたりまえだったこの国は、存亡の危機に立たされていると言っても過言ではないでしょう。

山野の幸も安心して口にすることはできなくなりました。キノコ狩りの便りが聞かれますが、放射性物質を大量に吸収した汚染キノコも採取されています。スウェーデンで、「市民にはだれにでもキノコ狩りの権利が認められているんです」と伺いました。秋の野山に入り、家族でキノコ狩りをするのが市民の大きな楽しみの一つなのだそうです。自然と人間の親しい関わりを大切にする風土と文化があることを、強く感じました。海の

幸・山の幸の収穫を喜び味わい、健康に労働できることに感謝する、素朴な幸せをみんなで分かち合う瑞穂の国の祭りが元気に再生することを願っています。

東日本大震災と福島原発事故は、経済、産業、社会的サービス、そして私たちの日常生活などすべてが、自然環境も含めた地球規模の相互連関の中にあることを万人にはっきりと自覚させたのではないでしょうか。私たちのささやかな生活、地域が生み出してきた文化・社会を崩壊させた原発事故は、あらゆることがとうに一国の問題ではなくなっていたことを改めて衝撃的に知らしめました。今回は、「グローバル化の中の社会と文化」と題して、世界が急速に相互依存の度合いを大きくする中、多様な視点からそれぞれの国・地域の文化や社会の魅力・特色を取り上げて御寄稿いただきました。野中進先生（教養学部）には、国際化が迫られる時代の新たな大学教育の試みと国際的視点をもつことの重要性を語っていただきました。石田かおり氏（福祉施設職員）には、フィンランド・スウェーデンの施設や学校を通してみた文化・社会を綴った北欧紀行をお寄せいただきました。清水由紀先生（ニューヨーク大学）には、最近のニューヨーク事情と、アメリカの私立大学の豪奢な図書館の様子をエピソードを交えてご紹介頂きました。「けやきの窓」では、薄井俊二先生（教育学部）に、身近なさいたま市や見沼の緑地について、歴史・自然・環境・生活・文化と多角的重層的な視点から解きほぐした「推薦図書」をご紹介いただきました。

グローバル化は、私たちの日常に強く関係し大きな影響を及ぼします。環太平洋連携協定（TPP）の許諾は、外国品の流入を促進し、確実に日本社会の将来を左右するでしょう。農産物に限らず、社会サービスや医薬品・医療等全分野に関わり、関税（自主権）の完全撤廃が目的です。グローバル化が世界中を飲み込む中、世界各国および日本各地の地域社会・文化は、どのような現状にあり、今後どのように変貌していくのでしょうか。本号が、「グローバル化」時代の日本と私たちの生活を考えてみるきっかけになればと願っています。

（図書館長　坂西友秀）

週に一度は「参考書コーナー」タイムを

私は教養学部の授業を受け持つことが多いので、今日は教養学部の話をいたします。教養学部では今年度（平成 23 年度）から二つの大きな変化がありました。一つは、

アカデミック・スキルズの必修化。もう一つは、第二外国語の必修化です。どちらも大きな変化で、今年の新入生は新しい教育制度の第一期生となりました。どちらの変化も、図書館のあるスペースの積極活用と切っても切れないことを、お話ししたいのです。

まず、アカデミック・スキルズですが、これは数年前から「現代教養演習」という名の特別授業で試されていたものが、ついに必修化されました。近年、高校で学んできたことと大学で学び始めるスタート地点に若干の開きがあると言われます。たんに知識の問題というより、「大学での勉強のしかた」が身についていないと言われています。たとえば、文章の書き方や本の探し方､授業での発言や発表のしかたなどです。アカデミック・スキルズではこうした点に重点をおき、1 年生の前期に少人数指導の授業を行います。

大学に入っていちばん新入生を戸惑わせるのは、授業での質問・発言を強く求められることではないでしょうか。私が受けもったアカデミック・スキルズでもそのことがよく話題になり、「どうすれば授業で質問・発言しやすくなるか」について学生同士でアイディアを出し合ったり、「先週、自分はどの授業でどういう質問・発言したか」、報告してもらったりしました。

ある学生は「自分は地方政治に興味があるので、地元の政治家を招いてお話をうかがう授業でよく質問できた」と話していました。やはり自分にとって面白い、「目玉」の授業を見つけるのが大切でしょう。授業でよい質問・発言ができれば励みになり、「次回も手を挙げよう」という気持になれます。ささやかな成功体験を重ねることが自信につながります。

ところで皆さんは、図書館の「参考図書コーナー」（貸出カウンターのすぐそば）に新書・文庫の本棚があることをご存知でしょうか。図書館では最新の新書・文庫を入れてくれています。自分に関心のあるテーマとつながりがありそうな題名の本を見つけたら、パラパラっとでもめくってみてください。新書類は読むのにそれほど時間がかかりませんし、分かりやすく書かれています。あらかじめ知識を入れておけば、授業での発言はひじょうに容易になります。

本年9月にウラジオストックに訪れた時の写真.
天然ガス景気にわく町は建設ラッシュである.
来年はAPECのサミットもある.

もう一つは第二外国語の必修化です。私自身がロシア語を教えていることもあり、大学時代に英語以外の外国語とその文化に触れることはたいへん貴重だと考えています。英語が世界語なのは確かですが、だから「英語しか勉強しなくていいんだ」というのは論理が飛躍しています。私の学生時代の友人で、埼玉大学工学部を出た男がいますが、彼は学生時代からロシア語が大好きで、プラント建設会社に就職してからも

ロシア語を学び続け、今ではロシア方面の重要な仕事を任されています。数年前の「サハリン 2」の開発にも携わりましたし、今年の 10 月からモスクワに赴任しました。彼が言うには、「英語だけでも仕事はできなくないけれど、現地のスタッフと親しくなるにはその国の言葉を知ることが大切」だそうです。

外国語を勉強するのにもっとも適しているのは、時間もあり頭も柔らかい学生時代です。大学時代に新しい外国語に挑戦しないのはもったいない！多くの埼玉大生にトライしてもらいたいと願っています。

図書館には多くの外国語の教科書、参考書、そして辞典類があります。参考図書コーナーに陣取れば、外国語の授業の予習・復習には事欠きません。ぜひ週に一度は「参考図書コーナー」タイムを作って、いろいろな辞典類を引っ張り出して、宿題に取り組んでみてください。図書館が身近になり、思いがけない発見もあるでしょう。

（埼玉大学教養学部准教授　野中進）

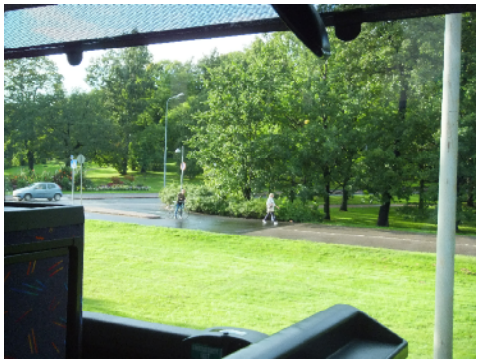
北欧を旅してみて
～ありのままを大切に生きる国～

福祉従事者にとって北欧といえば一度は訪れたい国ではないだろうか。私も例外なくその一人であった。そのため今回北欧の施設視察のお誘いを受けた際、すぐに参加を決めたものの今の施設の現状から 9 日間の休日をもらうことは難しく、このような機会に巡り合うことはそうそうないと考え、仕事を休めなければ辞める覚悟で施設長に打診に行った。しかし意外にも「若いうちしか経験できないことだから」と二つ返事で承諾していただけたことに拍子抜けをしたが、これで堂々と休暇をもらい参加できると心が躍った。

いよいよ渡航の日。「福祉の国」にいけるとワクワクとドキドキを感じながらチェックイン。エンジンがかかりいよいよ出発、という時にエンジントラブルがあり 6 時間以上飛行機に閉じ込められた揚句に、欠航となり出発が次の日に見送られ、始めから不安なスタートとなった。

渡航初日よりアクシデントがあったものの無事にフィンランドへ到着。毎日蒸し暑い日本と比べ、カラリと涼しい空気が私の

体を包み込んでくれた。バスで市内に行ってみると緑と岩と水に覆われた光景がすぐに目に飛び込んできた。フィンランド人は岩をとても大事にしており、なるべく崩さないようにしていると聴いた。自然と共存していると感じた最初だった。



今回の目的である施設視察について私なりに感じたことについて述べてみたい。あくまでも私自身が感じたことであり、このことがすべてではないということを断っておきたい。

私たちが視察させていただいた４施設では木の枝や花が必ずきれいに飾ってあり、日本の施設では植物を食べてしまったり、倒してしまい怪我することを恐れ、必要のないものはなるべく排除しようとする傾向

があるが、フィンランドでは食べてしまったり怪我をしてしまったら病院へ行けばよいと職員はいう。医療費がかからないとはいえ、なんとおおらかな国民性なのかと少々びっくりもした。またそのことについてご家族からは不満の声が出てこないと言うから、日本ではありえないことだとさらに驚いた。

保育園ではよく外遊びや散歩に出かけるという。このこと自体は日本の保育園でもよくあることではあるが、フィンランドといえば冬は極寒の地でもあり、外に出る判断はどのようにしているのかという問いに、「マイナス３０度程度なら取りあえず外に出します。そして職員が必ず一緒に出ている為、それで寒いと感じるようならば１５分など短い時間にします。今の防寒着はとても優れているので寒さが防げます。」と語ってくれた。

実際にこの日も１歳児がこれから庭あそびということで準備をしていたが、暖かそうな防寒用のつなぎを着て準備していた。これが真冬にも当然のこととして行われている風景なのだと思うと、日本の子どもは過保護なのではないかといささか心配にもなった。

施設の作りの面でも驚かされることがあった。日本の施設の印象とはかなり異なり、施設というよりもむしろ居住空間ということだった。日本では利用者が生活しやすく、また職員も介助しやすいように引き戸であったり必要最低限の家具しかないのに対し、フィンランドでは一般家庭と同様に開

き戸で極寒の地ということが関係するのか扉自体は健康な私が開くのも重たいと感じるようなつくりであった。また各居室にはキッチンがついていて実際に調理をしている方も多く、包丁等の刃物も当然持ち込んでいるとのことだった。入居者一人一人に専属の介助員がおり、必要な時に直通の携帯電話へ電話で依頼するという。サービスに対しての料金制な為、朝食を自分で作ればそれに対しては費用がかからないという。本来あるべき姿を基本としてその中で必要なサービスを必要なだけ受け、それに対する対価を支払うという、なんとも合理的な制度であるが、本来あるべき福祉とはこういうことなのではないかと感じると共に、効率性等は除外視しており、どちらが利用者にとっての幸福なのかと考えさせられる結果となった。

そして更に福祉の国と感じさせてくれたのが、街中になんとイクメン（育児を積極的に行う男性）が多いことか。日本では保育所へ子どもを送っていくのはほとんど女性であるのに対し、朝早くから男性が子どもをベビーカーに乗せ押していたり、背負っている姿をよく目にした。また女性が就労していることがほとんどである為、保育園では朝食から始まるというのにも驚きである。女性が働きやすい環境が整っていると羨ましくも感じた。

私にとってフィンランドは自然を大事にしそれを壊さずに共に生きることと、福祉において基本は崩さずにその中でどう生きるのかという生き方が重なって見え、ありのままに生きること、それを大事にしているように感じた。

今は初めての訪問で表面的な一面しか見えていないのかもしれないが、またいつの日か訪問する機会があれば、その時はどのように感じるのかということも楽しみである。

初日にアクシデントに見舞われたものの充実した 9 日間を過ごせたのは、現地で案内してくれた方や旅行を準備してくれた方、そして素晴らしい仲間がいたからこそだと感謝してもしきれない。人は支えあって生きていることを実感できた旅となった。

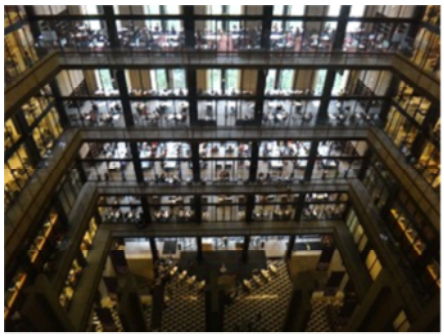
（福祉施設職員　石田かおり）

コラム

ニューヨーク大学の図書館の紹介

私が今研究を行っているニューヨーク大学は，いわゆるキャンパスというものがなく，マンハッタン中に建物が散らばっています。紫色の“NYU”（New York University）と書かれた大学旗が目印です。数十に及ぶ学部やセンターがある，マンモス大学です。図書館も 10 館以上あり，一番大きな図書館が私の研究室のある建物のすぐ近くにあり，よく利用しています。今回，坂西図書館長より，研究室が隣のよしみで（！？）本稿を書くご依頼をいただいた際に，「大学図書館のこともぜひ」とおっしゃってくださいましたので，簡単に紹介させていただきたいと思います。私はもっぱら本を借りるのみの利用しかなく，中の施設をよく知りませんでしたので，こちらで知り合った Judy さんに案内していただきました。

←大学図書館内の案内をしてくださったJudyさん(右). ニューヨーク大学で25年間ダンスを教えていらっしゃるだけあり，いつも背筋がピンと伸びていて，とっても素敵な女性です♪



中央部分が吹き抜けになっています. ↑

12階建ての巨大な大学図書館. ↑

図書館の中に入ると，中心部分がすっぽりと吹き抜けになっています。マンハッタンの一等地にあるというのに，何とも贅沢な作りです。アートが優先された設計だそうで，光のよく入る素敵な空間になっています。

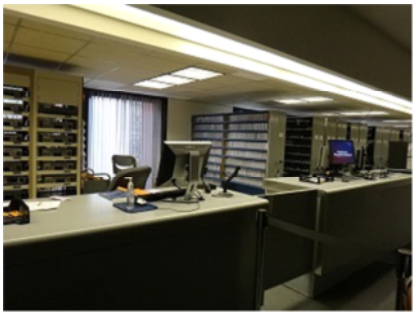
普通の図書館と同じく分野ごとに分けられた図書が中心ですが，最も印象的だったのは，勉強・作業のためのスペースが非常に多いことです。院生や教員用のコラボレーション・ルームには，大きなモニターとホワイトボード，ラウンドテーブルが設置されており，中では院生らしき学生達が熱心にディスカッションを繰り広げていました。学生用の勉強スペースは随所にありますが，用途別に細かく分かれており，中には博士論文執筆専用の部屋まであるのには驚きました！

興味深かったのは，机と椅子とライトが置いてある，ドア付きの個室がたくさんあったことです。中で勉強していた修士課程の院生に，どのような手続きでここを借りたのかを尋ねたところ，オンラインで予約したとのことでした。一日限りで借りられる部屋もあれば，（博士課程の院生と，”Faculty”と呼ばれる専任教員限定ですが）セミスターや年間単位で占有できる個室もあるそうです。

個室。オンラインで予め予約したら使えます.

コラボレーション･ルーム

さて，このように一通り大学図書館をまわってみて感じたことは，「こんなに充実しているのが大学図書館として普通なのか！？」という疑問です。こんなに豪華な大学図書館を，これまで見たことがなかったので・・・。そこで，同じマンハッタン内にあるコロンビア大学とニューヨーク市立大学の院生や教員の方々に，各大学の図書館の様子を聞いてみました。すると，コロンビア大学（私立）は大体同じような充


フィルムセンター

週1回のマッサージサービス

実ぶりとのことでしたが，ニューヨーク市立大学（公立）はもっと簡素だそうです。つまりは，ニューヨーク大学やコロンビア大学は私立大学であり，学費の高さは全米でも一・二を争うほどなので，これくらいの設備の提供は当たり前，ということなのでしょう。また，大学の規模がとてつもなく巨大であるため，図書館もそれに応じた規模になっているようです。上記で紹介した図書館だけでも，利用者は毎日 7400 人にのぼるそうです。

ニューヨーク大学では，高校生をはじめとした外部向けの図書館案内ツアーを，とても頻繁に行っています。図書館を大学の一つの「顔」として，積極的にアピールしていることがうかがえます。ちなみに，この大学を志望する，全米や世界からの受験生にとってのもう一つの魅力は，この図書館をはじめとした大学関連施設に，ハリウッド俳優，ダンサー，映画監督の二世などが多く出没することだそうです。しかし，残念ながら私はまだ一度も出会えていません。いつか出会えることを目当てに（！？）もっと頻繁に図書館通いをしてみようかな？と思う今日この頃です。

（ニューヨーク大学客員研究員：
教育学部准教授 清水由紀）

けやきの窓

私の推薦図書

さいたま百景選定市民委員会編『市民が選んだ　さいたま百景』
（さきたま出版会、２０１０年）

さいたま市は特徴のないまちだと言われる。河川や水辺はあるが、山や海のような大自然はない。歴史のある神社仏閣もなくはないが、世界遺産に登録される程のものではない。一定の規模の商店街はあるが、隣接する東京にはかなうべくもない。

そんな、何事にもそこそこのさいたま市ではあるが、いまはやりのまち歩きなどをしていると、結構面白い景観を見つけることがある。一見すると何げない光景なのだが、自然の地形が微妙に反映していたり、歴史や人々の営みが感じられたりする。そんな場所を見つけ、思いをめぐらしていくと、さいたま市も結構面白いなと感じ、まちに愛着を感じてくる。

そこで、さいたま市を愛するものたちが集まり、市民目線で見た、さいたま市の特徴的な景観を選んで、人々に公開してみよう、という試みを行った。専門家にも入っていただき、助言も得ながらまとめたのが、本書『市民が選んだ　さいたま百景』である。名所旧跡や美しい風景を集めたものではなく、さいたま市らしさ、「さいたま市の今（21 世紀初頭）」をよく表している景観を選び出すことにし

た。

有志の視点では限りがあるので、広く市民に公募したところ、400 点以上の応募が集まった。そこで、景観を「元々の地形や自然を表す風景」「現代都市の営みを表す風景」などの 10 のカテゴリーに分け、それらを「代表性（さいたま市らしさ）」「時代性（21 世紀初頭ならでは）」などの六つの評価軸によって評価し、選定した。

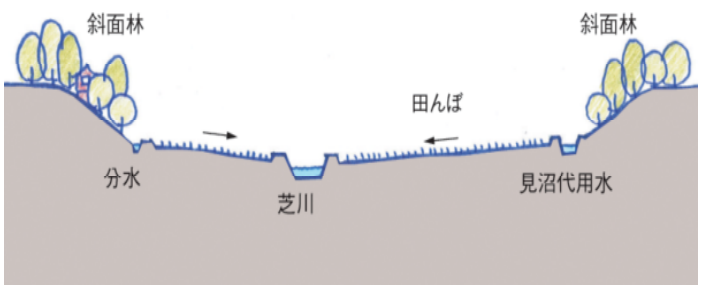
景観の紹介に当たっては、写真と文章で紹介することをメインとしつつ、古い地図や空中写真等も活用、場合によっては自分たちでも作図した。様々なビジュアル資料を用いることにより、景観の特色が浮かび上がるように工夫した。

そのうちいくつかを紹介しよう。

①生物たちを育んでいる芝川と斜面林…元々の地形や自然を表す風景

【わしやま橋から芝川下流を望む．遠景はさいたま新都心のビル群】

表紙にもなっている景観は、見沼田圃の中にある、芝川と斜面林である。見沼田圃は、1260 ヘクタールに及ぶ広大な緑地空間で、両側の斜面林、その足下の見沼代用水、田圃や畑、そしてその中央を流れる芝川からなる。かつては沼地だったが、江戸時代に徳川吉宗の命令で新田として開発されたものである。市街地に隣接する大規模農緑地空間としては、他に例を見ない、さいたま市のシンボル的な空間であろう。



【見沼田圃断面模式図】

芝川や田圃には、カモやカイツブリ、カワセミといった多様な鳥類が生息し、メダカ・モロコなどの魚類も多い。また斜面林を中心とする緑地には、クヌギ、コナラ、ムクノキ等の多種多様な樹木が繁茂しており、豊かな生態系を保っている。

【芝川と大和田付近の空中写真。米軍撮影1947～48年】

近年は、水質の悪化や開発が迫るなど、保全を脅かす動きもあるが、緑を管理する市民団体が入って保全活動に努めたり、市民田圃があちこちに開かれていて、田植えや取り入れで賑わったりしている。そもそも田圃とは、自然ではなく人工的なものではあるが、市民参加型の保全や活用は、新しい自然との共生のあり方を示すものであろう。

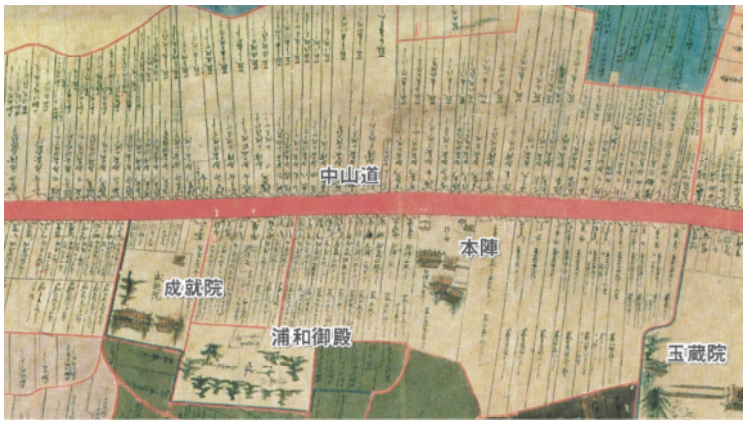
②今を映す中山道浦和宿の町屋…昔からの風土や生活を伝える風景

浦和の中心街の中山道沿いに、平べったい高層マンションが南北に幾棟か並んで建っているところがある。ドミノマンションと呼ばれ、周辺の戸建て住宅はおろか、北側の同じマンションからも日照を奪ったものとして、悪名高いものがある。

なぜこんな東西に長い建物が、連続して建てられたのであろうか。

その背景には、江戸時代のまち割りの特徴がある。

下の頁の『浦和宿絵図』を見ると、中山道に接する部分は極めて間口が狭いが、その奥に細長い敷地が展開しているのが確認できる。接道部分に店舗が開き、その奥に店、更にその奥に住宅や庭・蔵などが一定のルールに則って設けられていた。沿道は賑やかな出店が続くものの、敷地の奥に入れば、両隣も住宅地であって、近隣の居住環境とも調和したまちを作っていた。こうした短冊状の敷地が並ぶのが宿場まちのありようであったのである。

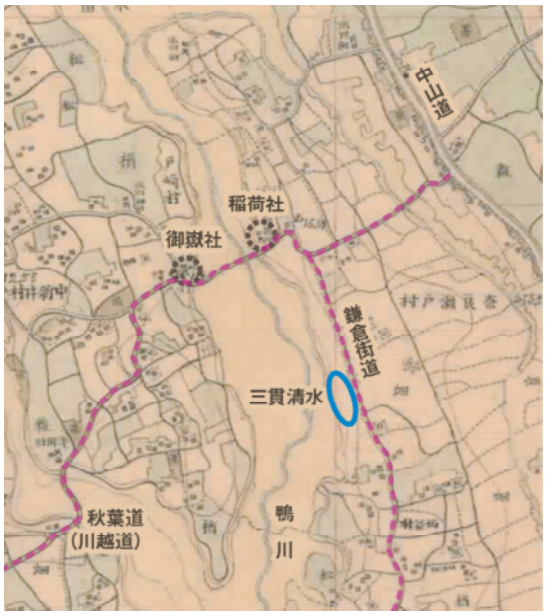


現代のドミノマンションは、開発業者がこうした短冊状の土地をいくつか買い集めて束ね、敷地面積ぎりぎりに高層建築物を建てたものである。

昔の区画の一部を引き継いだものとも言えるが、周囲の都市環境を全く考慮しないという点では、現代社会の醜い側面を表している景観であると言えよう。

③鎌倉街道と三貫清水…道の風景

三番目は「道の風景」から。「道」は（けもの道を除けば）人間が作るものである。その意味では人々の生活や営みと深い関わりを持つ。その一方、昔の道は、土地のありように限定されるものであり、その意味では自然の一部でもあった。



【明治前期フランス式彩色図より】

さて、タレントのタモリが地理好きで、とりわけ坂道を愛好していることはご存じだろう（『タモリの Tokyo 坂道美学入門』講談社）。東京の坂道は、複雑に入り組んだ武蔵野台地が生み出したものだが、台地の縁に湧水が見られることも指摘している。実はさいたま市も、大宮台地と支台が入り組んで意外に坂道が多いが、北区奈良町には台地の縁に斜面林が残り、湧水が湧いて豊かな水と緑が展開している一角がある。太田道灌がほめたと伝えられるこの湧水は三貫清水と呼ばれ、かつては幾筋もの流れが池を作りながら鴨川に注いでいたという。

農業のためだけでなく子どもたちの豊かな遊び場でもあったが、昭和 40 年代ごろから宅地化が進み、泉の水量も乏しくなった。その後行政による保護の取り組みに加え、平成 5 年から活動を続ける「三貫清水を守る会」の人たちにより保存整備がなされている。

三貫清水緑地の雑木林の中を南北に鎌倉街道が通る。大宮北高の横を通り過ぎると秋葉道と交差する。鴨川を渡って一旦上尾市に入り、すぐにまたさいたま市に戻り、やがて秋葉神社に至る。鴨川の河川敷を夾んで東の岸には稲荷社が、西の岸には御嶽社がそれぞれやや小高いところに位置して対峙しているかのごとくである。歴史と自然との関わりを感じられる景観をなしている。

④緑あふれる埼玉大学…元々の自然や地形を表す風景

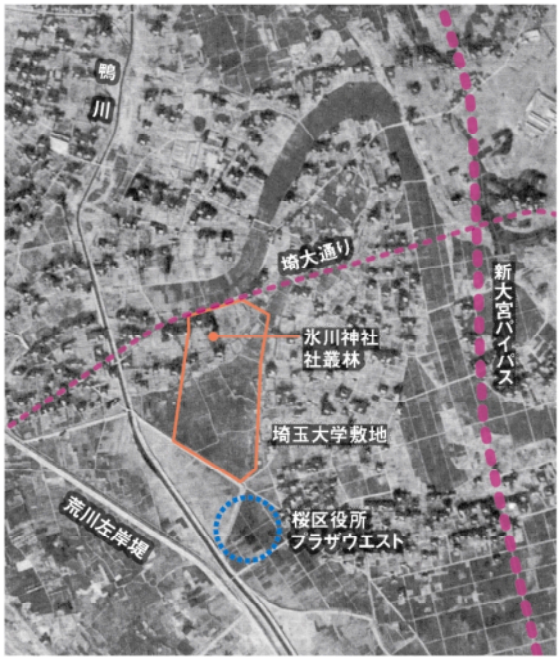
実はわが埼玉大学も百景に選ばれている。現在の大久保キャンパスは 1960 年代後半からのもので、それまで水田地帯だったところに立てられている。

現在図書館前や正門西側に残る林は、かつてここにあった氷川神社の社叢林であった。氷川神社は、今は上大久保（ダイクマの裏）に移転しているが、かつては自然堤防の微耕地に位置し、羽根倉の渡し（今の羽根倉橋）から与野へ抜ける鎌倉街道沿いにあって、諏訪神社と共に市が立っていたという。

埼玉大学は今でも緑が豊かな場所となっているが、その背景にはこんな歴史があったのである。

以上、いくつかの景観を紹介してきたが、いかがだっただろう。

景観は、自然のものをベースに人々の様々な営みが積み上がって形成されるものである。このことを念頭におきつつ眺めてみると、いつもは見過ごしていた風景から色々なものが見えてくる。ぜひこの本を手に取って散策したり、自転車で回ったりして、さいたま市を見直す旅をしていただきたい。



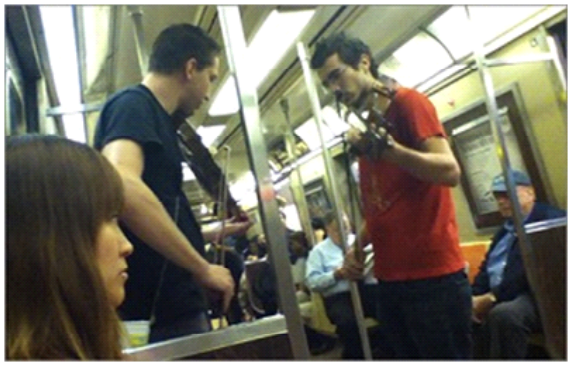
また、さいたま市以外に住む人達には、この『さいたま百景』のように、自分たちのまちの景観を改めて見つめ直し、その魅力や価値を再認識する機会になればいいと思う。わがまちの「百景」選びをしてみてはどうだろうか。

（教育学部教授　薄井俊二）

ニューヨークの街角から

アーティストたちの街

さて，これは，どこで撮影した写真でしょう？



答えは，ニューヨークの地下鉄の車内です。こんな風景にもそろそろ慣れてきました。今年度は 1 年間の長期研修の機会をいただき，ニューヨーク大学心理学部にて研究をしています。ニューヨーク生活をはじめたころに，最初に受けたカルチャーショック（？）がこれでした。ある日，地下鉄に乗るやいなや，2 人組

がヴァイオリンを演奏し始めたのです。結構上手なようでしたが，一体何が始まったのか！？と，とにかくびっくりしました。

日本ではあり得ない・・・。しかし，周りの乗客をそっと見渡してみても，皆全く意に介していない様子。呆然としてこの 2 人組みを眺めていたら，彼らは次の駅に着く少し前に一曲弾き終え，小袋を持って乗客たちの前をまわりはじめました。何人かの乗客は 1 ドルほどのお札を渡しています。どうやらチップのようです。私の前にも来ましたので，反射的に 1 ドル札を渡すと”Thank you!”と笑顔が返ってきました。その後この 2 人組は，チップを集め終わり，次の駅で降りて行きました。

ニューヨークの地下鉄に乗っていると，このようなパフォーマンスに２・３回に 1 回くらいの割合で出くわします。観察の結果，その内容は大別すると次の 3 つのパターンがあることがわかりました。

① 楽器の演奏（ギター，ヴァイオリン，アコーディオンなど）やアカペラの歌
② ダンス（音楽をがんがん鳴らし，周りの乗客をどかせた上で，床の上で回ったり倒立したりします。）
③ 自らの窮状を語る（「私はエイズで，娘もエイズだと診断された。でも明日食べるパンもない・・・」など。ただし内容の真偽は不明。）

いずれも大音量なのですが，周りの乗客が咎めることはまずありません。しかも，パフォーマンスの質（③の場合は，どれくらい話がよくできているか）がよいと判断したらチップを渡しているようです。このような地下鉄内の風景は，アメリカ国内でも，アーティストたちの街，ニューヨーク独自のもののようです。私も最初こそびっくりしたものの，最近ではすっかり慣れてきて，街のいたるところで繰り広げられているパフォーマンスを楽しんでいます。そしてニューヨーカーたちの，まだ芽が出ていないアーティストへの温かいまなざしや，ホームレスの積極性に，妙に感心してしまっています。

← 市立図書館の前で毎週末繰り広げられるダンスパフォーマンス。
ちなみにこの図書館は，映画“Sex and the City”で主人公のキャリーが結婚式を挙げ（ようとし）た場所です。

← 地下鉄の改札を入った構内では，いつも誰かが演奏しています。大半のパフォーマーは，Music Under New Yorkという公的なプログラムの元で，オーディションによって選び抜かれた人たちで，許可を得て演奏しています。そのためか，とてもレベルが高いです。

すっかり平和なマンハッタン

さて，このようにして始まったアメリカ生活も，そろそろ折り返し地点です。よく日本の知人たちから，ニューヨークに住むのは危険じゃないか，と聞かれますが，半年ほど住んだ実感では，マンハッタン内に限れば（一部を除いて）とても安全です。夜遅くに道を歩いたり地下鉄に乗ることがあっても，人は常に多いので，怖いと感じることはまずありません。むしろ，見知らぬ人たちが親切なことに驚きます。私は極度の方向音痴で，どんな場所でも迷子になれるという特技を持っており，碁盤の目のように道が整備されたマンハッタンでもよく道に迷います。しかし，地図を持ってキョロキョロしていると，必ず誰かがすぐに「どこに行きたいの？」と声をかけてくれ，道を教えてくれるのです。新鮮だなあと思い，共同で研究をしているニューヨーク大学の教授に話したら，「アメリカ人は利害が絡まなければ親切なんだよ」という返事が返ってきました。本当かどうか分かりませんが・・・。

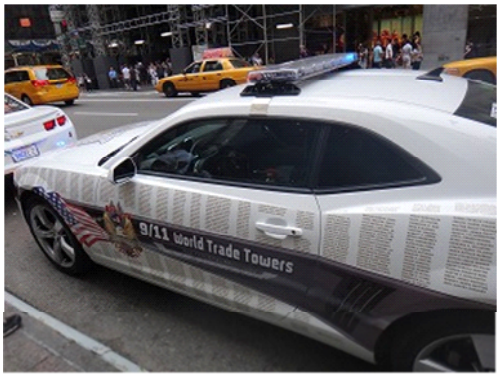
今ではすっかり平和なマンハッタンも，ほんの 10 ～ 15 年前までは，ここまで安全ではなかったと聞いています。ここ 15 年ほどで，すっかり様子は変わったようです。ただし今年は 911 のテロからちょうど 10 年の節目でしたので，その追悼式典のあった 9 月 11 日直前は「新たなテロが起こるのでは！？」という憶測が飛び交い，大変な警戒体制でした。マシンガンをもった警官がうろうろしており，地下鉄の広告やメディアは”See something, say something”キャンペーンをしつこいほどに繰り返していました（日本で言う「不審なものを見たらお近くの乗務員にお知らせください」。これは今も続いています）。

普段でもニューヨーク市警の警察官はあらゆるところに配置されていて，その数たるやすさまじく，これがこの街の平和を保っているのだなあと納得します。ただし，警察官を個別によく見ると，ずっと携帯をいじっていたり，スポーツの話に興じてい

たりして，何だかとってもマイペース。タイムズスクエアでは，警察官がいつも国内外からの観光客との記念撮影に，満面の笑みで応じています。見るたび何だか気が抜けてしまいますが，まあこれも，マンハッタン内が平和であることの証なのかもしれません。

← いたるところでＮＹＰＤ（ニューヨーク市警）のパトカーと警察官を見かけます.

9.11当日には，ワールド・トレード・センターの犠牲者の方々の名前がぎっしり書かれたパトカーが，5番街に停まっていました. →



「日本」はすでにメタファー？

「人種のサラダボウル」と言われるニューヨークには，本当に様々な国籍，民族の人々が集まっています。アジア人も多いですが，圧倒的に中国人と韓国人が多い印象を受けます。中国人街や韓国人街はありますが，日本人街はありません。ニューヨーク大学でも日本人学生にはめったに出会いませんが，中国人と韓国人の学生はたくさんいます（そして彼らは，ものすごくよく勉強します）。世界のあらゆるものが集まるここニューヨークで，日本の影が薄いのは寂しいな，と思っていましたが，最近日本はいたるところに「感じられる」ことが分かってきました。

一番明示的なのは，ユニクロです。10 月中旬に，5 番街の一番よい立地で，2 店舗が新たにオープンします。その宣伝のため，街中ユニクロだらけです。ポスターは”Japan technology” というフレーズを前面に出しています。また，夏には，私の住まいのすぐ近くのブライアント・パークで，毎年盆踊りが行われます。そして「一風堂」をはじめとした日本のラーメン屋は，ラーメンブームのニューヨークで大人気です。

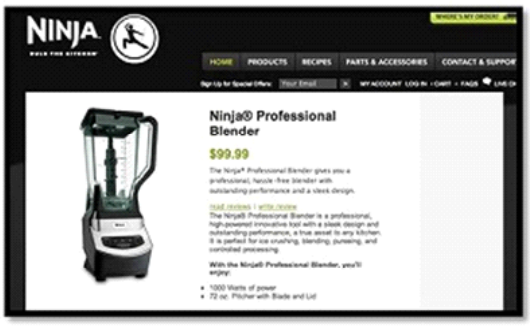
← ユニクロのポスターにジャックされた，
グランド・セントラル駅の地下道

“Japan technology”
が売り →

毎年恒例の盆踊り(bon festival) →
アメリカ人が漢字の書かれた渋い浴衣を
着て，驚くほど上手に踊ります．

しかしもっと暗示的な形で，「日本」は潜んでいます。例えば，「日本食＝ヘルシー」という図式はすでに定着しており，「緑茶入り」ドリンクは健康志向のドリンクであること，「すしを食べる」ということはヘルシーで高級な食事をするということを意味します。その他，「忍者」をブランド名にしているミキサー，「サムライ」を使った自動車の CM など，「日本」という言葉を使わなくても，日本のイメージがメタファーとして使われているのをいたるところで見聞きします。そしてこれらは，どちらかと言うと，すべてポジティブなイメージであることに気づきます。日本人の影は一見薄いけれど，確実にポジティブな印象をもたらしているのかもしれません。

← “ 緑茶入り”はちみつドリンク



“NINJA”ブランドのミキサー。素早く具材 →
や氷を砕けるところが一番のセールスポイント

さて，これからニューヨークの街は，ハロウィン，感謝祭，クリスマスと年末イベント一色になり，大いなる盛り上がりを見せそうです。寒がりの私にはニューヨークの秋冬は厳しそうですが，研究の傍ら，せわしなく，

刺激的で，パワーあふれるここマンハッタンにて，もう少し異文化ウォッチングに励んできたいと思います。以上，ニューヨーク街角リポートでした！

（ニューヨーク大学客員研究員：教育学部准教授・ 清水由紀）

既刊 「 武蔵野 」一覧

埼玉大学図書館報「武蔵野」は、図書館の動向や皆様のご意見などを紹介する小冊子です。「むさしの」の後継誌として、2009 年 6 月から刊行しています。

1号（2009. 6刊）

・「武蔵野」創刊（図書館長：坂西友秀）

・図書館ニュースの発刊によせて（総合情報基盤機構長：川橋正昭）

・旧制浦高記念展示室の完成を願って　（旧制浦高同窓会常務理事：上田治三郎）

・館員通信（利用サービス係長：小野寺伸）

2号（2009. 8刊）

・SUCRA について（専門員：村田輝）

・ SUCRA（機関リポジトリ）で利用の多い文献トップ30

3号（2009. 10刊）

・大学図書館に望むこと（埼玉県立白岡高等学校・教諭： 若海由美）

・こんな図書サービスがあればいいな～（文化科学研究科博士課程： 李芝善）

・けやきの窓（理工学研究科長： 水谷忠良）

・館員通信（元利用サービス係： 白本清香）

4号（2010. 2刊）

・歴史史料デジタル化の現状： 過去の記録は誰のものか（教育学部准教授：鈴木道也）

・けやきの窓： 私の推薦図書（経済学部長：伊藤修）

・「図書館と県民のつどい埼玉 2009」:「デカンショ」と「ファーブル」（利用サービス係長：小野寺伸）

・「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告（SALA 広報担当：湊伸子）

・ホームページがリニューアルされます！（工学部 4 年 渡邊雄）

5号（2010. 4刊）

・＜フレッシュマン特集号＞

・図書館紹介（図書館長：坂西友秀）

・図書館オリエンテーション

・図書館発見

「留学生・留学希望者にうれしいニュース」

「グループ学習室新設」

「官立浦和高等學校記念資料室」

・「デカンショ」によせて（埼玉大学教養学部准教授・哲学：高橋克也）

・子どもと図書・文化

「埼玉大学図書館の児童サービスについて（埼玉県立久喜図書館：山元明美）」

「そよかぜを知っていますか（そよかぜ保育室：橋本慶子）」

・けやきの窓（教養学部長／教授：高木英至）

6号（2010. 7刊）

・〈埼玉大学エコ特集〉

・AGRICULTURE （図書館長：坂西友秀）

・埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪（経済科学研究科博士前期過程：堀合知子）

・有機農業に興味を持たれた方へ（経済科学研究科博士前期過程：堀合知子）

・有機農業に出会って（経済科学研究科 1 年：山本仁）

・お薦めの本（経済科学研

究科１年：山本仁）

・埼玉大学有機農業研究会の展望（経済科学研究科：有坂昌平）

・本の紹介（経済科学研究科：有坂昌平）

・日本大学文理学部図書館研修（図書資料係：早川雅代）

・けやきの窓（教育学部長／教授：山口和孝）

・全国国立大学図書館協会総会報告（図書館長：坂西友秀）

7号（2010.11刊）

・（特集　教育・研究と書籍）

・はじめに（図書館長　坂西友秀）

・過疎という問題に何処よりも早く直面した早川南小学校について（山梨県早川南小学校校長　村松秀樹）

・絵本を用いた活動が自閉症児に与える効果について（教育学部教育心理カウンセリング専修４年　成瀬酉）

・「アナログ本」の存在感（森野うさぎ）

・私たちは電子書籍と電子教科書にどう向き合うべきか（教育学研究科学校臨床心理専修　孕石敏貴）

・けやきの窓（英語教育開発センター　長／教授　外山昇）

・埼玉大学の教育・研究と埼玉大学生活協同組合（埼玉大学生活協同組合理事長／経済学部　岡部恒治）

・既刊「武蔵野」一覧

8号（2011.4刊）

・（図書館の１年）

・東日本大震災からの復興を願う－「原発事故」が突きつけたもの－（図書館長　坂西友秀）

・知の世界への眩しさ（日本青年館公益事業部長・業務部長　佛木 完）

・大学の猫たち（理工学研究科教授　小松登志子）

・私の推薦図書（脳科学融合研究センター長／教授　中井淳一）

・埼玉大学図書館の活動

・既刊　「武蔵野」一覧

９号（2011.７刊）

・大学での学びを未来の創造に　（図書館長　坂西友秀）

・もしも大学時代に戻れたら（埼玉県立浦和図書館長　小川晴夫）

・大学生活折り返し地点に立って（理学部　山尾朋未）

・平成 23 年度　新入生向け図書館オリエンテーション（情報サービスチーム　岩崎真美・成田義樹）

・「けやきの窓」-私の推薦図書-（国際交流センター長・経済学部教授／安藤　陽）

・埼玉大学在職 30 年間を振り返って（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館管理部研究協力課図書係長／小野寺伸）

・お知らせ-図書館の節電対策について　（図書情報課管理チーム須永博夫）

・2011 年度　図書館会議委員

・既刊　「武蔵野」一覧

10号（2011.11刊）

・「グローバル化」の中の社会と文化（図書館長　坂西友秀）

・週に一度は「参考図書コーナー」タイムを（教養学部准教授　野中進）

・北欧を旅してみて～ありのままを大切に生きる国（福祉施設職員　石田かおり）

・コラム：ニューヨーク大学の図書館の紹介（ニューヨーク大学客員研究員・教育学部准教授　清水由紀）

・「けやきの窓」-私の推薦図書（教育学部教授　薄井俊二）

・ニューヨークの街角から（ニューヨーク大学客員研究員・教育学部准教授　清水由紀）

※ 図書館ニュース「武蔵野」は、埼玉大学図書館ホームページ・「図書館出版物」でご覧ください.